

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19520029

研究課題名(和文) 東アジア地域の思想・文化におけるルサンチマン研究

研究課題名(英文) Ressentiment research in thought and culture of East Asian region

研究代表者

菅野 孝彦 (KANNO TAKAHIKO)

東海大学・総合教育センター・教授

研究者番号：50221908

研究成果の概要(和文)：現在、日本と東アジア諸国とのあつれきを見るにつけ、国家間の利益追求競争にとどまらず、実利的問題の背後に横たわる各国国民、各民族のものの考え方・見方、すなわち東アジア諸地域における思想・文化領域へのまなざしこそが求められるであろうと思われる。そこで本研究は、日本・朝鮮半島・中国各地域の諸国民、民族のものの考え方・見方をルサンチマン概念を手がかりにし明らかにすることを試みた。

研究成果の概要(英文)：Presently, struggle with Japan and East Asian countries, not only to competition among nations for profit, people around the issues lying behind the pragmatic perspective of thinking of each race, East Asian countries in the region that is thought - seems to be what would be required to look into the cultural field. In this study, I attempted to reveal clues to ways of thinking views the concept of ethnic resentment for the peoples of Japan, Korean peninsula and China regions.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：倫理学・倫理学史

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：ルサンチマン、怨霊信仰、恨の思想、報怨以德の思想

## 1. 研究開始当初の背景

今日、東アジア地域における各国・各地域間のあつれき、とりわけ日本と他の諸外国とのあつれきが、すなわち島国と大陸といった地域間の差異が顕著なたちで見られる。それは、政治や経済の分野での反日感情の現れとして如実に理解されよう。

こうした事態が生じるに至った理由を、国家間の利益追求競争の結果といった実利的要因のみに求めるだけでは、問題の真の解決にはならないであろう。むしろ、日本と諸外国とのあつれきを見るにつけ、国家間の利益追求競争にとどまらず、実利的問題の背後に横たわる各国国民、各民族のものの考え方・

見方、すなわち東アジア諸地域における思想・文化領域へのまなざしこそが求められるであろうと思われる。人間の政治的行為、経済的行為の背後に思想的・文化的要素が常に横たわるといふ決定的な重要事項が喚起されねばならない。

国家間のあつれきといった事態に対して、人間の行為の学問としての倫理学は、いかに答え得るであろうか。それは、現実社会への提言を企図するという点では、生命倫理・情報倫理・環境倫理・経済倫理といった応用倫理分野の試みと軌を一にするといえるかもしれない。しかし、本研究は、国家間のあつれき問題に対する広範な提言をめざすものではなく、国家間のあつれきの背後に横たわるとされる思想・文化の相違点、類似点から問題への方途を探ろうというものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、国家間のあつれき問題に対する広範な提言をめざすものではなく、国家間のあつれきの背後に横たわるとされる思想・文化を、すなわち他者に対する行為主体の感情の問題を、ただ一点主題として取りあげる。その意味で本研究は、東アジア地域に尽きることはない将来にわたる根源的問題研究の一里塚にほかならない。

東アジア地域における思想・文化の特徴を、このようなルサンチマン概念でもって横断的に理解しようとする試みは、ほとんど皆無と言ってよい。もちろん、本研究で各地域において見出そうとする思想的特性に関するキーワードレベルでの先行研究は、皆無ではない。たとえば、「怨霊信仰」研究、「恨の思想」研究や「報怨以德の思想」研究に関して、若干の先行研究は見られるのは事実である。しかしながら、いずれの研究においても、各地域の個別的な叙史的記録的研究であり、理念次元での考究は見られない。それら先行諸研

究においては、ルサンチマン概念を東アジア各地域の思想・文化研究の横断概念として位置づけている研究は見られない。それゆえ、ここに本研究の意義を示すことができると思われる。

研究代表者によるニーチェやシェーラーにおけるルサンチマン研究の成果から獲得したルサンチマン概念を、東アジア各地域の固有性を意識しつつ、本研究を出発点としさらに深化・普遍化させたい。いわば、本研究は、東アジア地域という固有な場においてルサンチマン思想の事例研究を行う試みとも言えるであろう。

## 3. 研究の方法

本研究課題は、東アジア各地域の思想・文化を研究対象とする特徴をもつが、各地域を研究するにおいて各年度毎に日本、中国、朝鮮半島の三地域から研究重点地域を設定し、研究を推進する。研究を推進する過程では、もちろん常に三地域を意識しつつその思想・文化を考究する。東アジア各地域における思想・文化の特質をルサンチマン概念の各地域的変容研究という観点から、日本においては「怨霊信仰」の研究を、朝鮮半島では「恨の思想」の研究を、中国・台湾では「報怨以德の思想」の研究を中心にすえ、それぞれ主題化し研究に取り組んだ。

本研究課題の第一年度として、ニーチェやシェーラーにおけるルサンチマン概念の確定、及びルサンチマン概念の日本の変容とする観点からの「怨霊信仰」研究を進めた。「怨霊信仰」研究を主題化するに当たっては、神仏習合の歴史的展開の流れの中で位置づけた。

本研究課題では、神仏習合をめぐるこうしたパースペクティブをふまえ「怨霊信仰」をルサンチマン概念の日本の変容として位置づけて行きたい。まず、「怨霊信仰」の先駆的形態として、個々の人間の怨みをはらそう

とする素朴な形態をあげることができよう。こうした人々の素朴な動きが、政争で負け死に追いやられた者たちの御霊を慰めるために祀る「御霊会」の形成をうながすこととなる。御霊の具体例としては、謀反や謀反の疑いによって死罪・流刑になった崇道天皇（早良皇太子）・伊予親王・橘逸勢らの名をあげることができよう。こうした「怨霊信仰」の頂点となるのが菅原道真である。太宰府に憤死した菅原道真の怨霊は、京の都に様々な災厄をもたらしたと考えられ、天神信仰を形成するに至った。また、武士団の勃興とともに広がる八幡信仰と天神信仰「怨霊信仰」との結びつきをも考えた。

朝鮮半島における「恨の思想」については、まず歴史的パースペクティブで考える。第一点は、儒教思想との結びつきであり、第二点は、長きにわたる外国による支配との結びつきである。次に、こうした視点もふまえ、「恨の思想」の多様な表れを分析する。具体的には、「恨の思想」の表れを政治構造、社会構造、文化構造、宗教領域において分析する。たとえば、政治構造においては、権力者と非権力者間に、社会構造においては、富める者と貧しき者の間や両班・中人・常民・賤民といった身分制度において「恨の思想」がみられる。こうした分析を経て、その上で、ルサンチマン概念の朝鮮半島の変容として「恨の思想」を考究した。

ルサンチマン概念の中国的変容として「報怨以徳の思想」研究を考えた。『老子』における「報怨以徳の思想」を明らかにするとともに、蒋介石の言明に至るまでのこの思想の現れを歴史的パースペクティブの中でとらえる。また、易姓革命思想との関連において「報怨以徳の思想」とらえ、中国思想における位置づけを試みる。こうした分析を経て、その上で、ルサンチマン概念の中国的変容という

観点から「報怨以徳の思想」を考究した。研究の最終年度においては、東アジア各地域の思想・文化研究という点における研究の彫琢をはかり、次いで、東アジア各地域の思想・文化研究の横断概念としてのルサンチマン概念に基づく考究の彫琢をはかった。

#### 4. 研究成果

日本におけるルサンチマン概念の変容については、「東アジア地域の思想・文化におけるルサンチマン研究（平成20年度科学研究費報告）、1-14、2009」を著した。比叡山の僧慈円が『愚管抄』第巻七において語るように、怨霊とは、現世において深い怨みを抱きつつも、その怨みをはらすことができなかつたために、死後世を乱れさせ人に危害を加えることによって、怨みを冥界においてはらす存在と考えられる。自らを推した蘇我氏に反旗をひるがえそうとしたそぶりを見せたために、蘇我馬子の命を受けた東漢直駒によって殺害され崇峻天皇の崩御においては、殯も行われず葬られている。殯とは、人間の死後、埋葬するまでの間、遺骸を棺に納めて特別に設けられた建物に安置しておく葬送儀礼の一つであるが、崇峻天皇においては、これを執り行うことなく即日葬られたのである。同時代の敏達天皇や斉明天皇の殯が五年を超えていることを考えると、崇峻天皇の扱いはきわめて異例である。暗殺された崇峻天皇の死は、無念の死のきわみといえよう。そうであればこそ、殯において無念さ・怨みの念を慰撫することの重要性が説かれそうなものであるが、むしろ、殯せずに葬ることによって現世に復活することを防ごうとする考え方がみられる。これは、広い意味での怨霊の祟り、ルサンチマンを恐れることの証といえよう。奈良時代において非業の死を遂げた者のルサンチマンを、早良親王の怨念にみ

ることができよう。光仁天皇の皇子であり母が高野新笠である早良親王は、桓武天皇・能登内親王の同母弟にあたる。母方が下級貴族であったために立太子は望まれず、出家して東大寺羅索院や大安寺東院に住み、親王禪師と呼ばれていた。兄、桓武天皇の即位と同時に光仁天皇の勧めによって還俗し、立太子の礼が執り行われた。しかし、延暦四年（七八五）、造長岡宮使 藤原種継暗殺事件に連座して廃され、無実を主張し十八日間あまりも絶食して淡路国に配流の途中、河内国高瀬橋付近で憤死した。その後、桓武天皇の長男安殿親王（後の平城天皇）の発病や、妻旅子の母が没し、延暦七年には旅子も没した。延暦八年には天皇の母高野新笠が病死、桓武天皇妃藤原乙牟漏の病死など、相次ぐ近親者の不幸に見舞われた。それらは早良親王の祟りであるとして幾度か鎮魂の儀式が執り行われたが、人々が早良親王の怨念を怖れたことの表れといえる。平安時代における顕著なルサンチマンの表れとしては、崇徳上皇をあげることができる。保元元年（一一五六）七月二日の鳥羽上皇の崩御ごろから後白河天皇側は、崇徳上皇と鳥羽上皇との末期の対面を拒否するなど崇徳上皇と距離をとっていた。そのため、追い詰められた崇徳上皇は七月十日藤原頼長とともに白河殿に移り、平忠正、平家弘、源為義ら武士を召集し武力で天皇方を倒そうとした。保元の乱の勃発である。しかし、七月十一日には平清盛・源義朝・源義康らの白河殿への夜陰に乗じた奇襲攻撃により崇徳上皇方は敗走し、短時間で雌雄は決した。藤原頼長は矢傷によって死亡し、平忠正・源家弘・源為義は捕縛の後に処刑され、崇徳上皇は仁和寺に入って髪を下ろした後、白河天皇の下に自ら出頭したものの許されず、讃岐国に流刑に処された。崇徳上皇は、讃岐での監禁生活の中で、仏教に深く傾倒し極楽往生

を願うようになっていった。五部大乘経（法華経・華嚴経・涅槃経・大集経・大品般若経）の写本作りに専念して、死者の供養と反省の証にと、三年の歳月をかけて完成した五つの写本を京の安楽寿院に納めてほしいと朝廷に差し出したところ、治天の君となっていた後白河上皇は「呪詛が込められているのではないか」と疑ってこれを拒否した。『保元物語』によれば、これに激しく怒った崇徳上皇は、自分の舌を噛み切った血で「日本国の大魔縁となり、皇を取って民とし民を皇となさん」「この経を魔道に回向す」と五部大乘経の奥に誓状を書いたといわれている。

朝鮮半島におけるルサンチマン概念の変容については、「朝鮮半島における儒教受容、東アジア地域の思想・文化におけるルサンチマン研究Ⅱ（平成21年度科学研究費報告）、11-18、2010」、「朝鮮半島における恨思想とルサンチマン、東アジア地域の思想・文化におけるルサンチマン研究Ⅱ（平成21年度科学研究費報告）、2-10、2010」、「朝鮮半島における儒教受容 —高麗時代末から朋党闘争へ—、東アジア地域の思想・文化におけるルサンチマン研究Ⅲ（平成22年度科学研究費報告）、15-22、2011」において考究した。ニーチェが指摘した西欧社会におけるルサンチマンは、社会的弱者のもつ感情である。その意味で類似性を指摘できるように思われる。だが、恨とルサンチマンは、弱者の感情という点ではきわめてよく似ているが、根本的に異なるものである。ニーチェによれば、キリスト教のルサンチマンは、現実における富、権力等の多寡によって下位に置かれた者が、その現実的苦境にもかかわらず「他人、さらには敵のための愛に生きよ」という隣人愛の絶対的な真理を信じる。しかし上位者は、この真理に立つことがないゆえに、下位者は上位者を「悪いやつ」と規定する。そうして、

憎むべき敵を逆に愛することによって、下位者は最終的な道徳的勝利を得ようとする。下位者は、現実の困難な状況を取り除くことなく、隣人愛という観念において道徳的に勝利をおさめるのである。上位者を「悪い」と規定し、下位にある自分たちを「よい」とし勝利をうたう心のあり方がルサンチマンの意味を形成しているのである。

それに対して朱子学社会、韓国社会においては観念的な次元ではともかく、現実社会ではその上位者、支配者層は多くの場合高潔な道徳に基づいて生きているのではなく、利に生きている。したがって、下位者はそうした上位者層を「悪いノム」と規定する。表面上ルサンチマンと類似するといわれるゆえんである。しかしながら朱子学社会、韓国社会においては、下位者は「悪いノム」である上位者の悪いノムを愛することによって道徳的勝利を得ようとはしない。なぜなら、下位者は、自分が上位者に上昇する可能性をもつがゆえに、現実の悪い上位者を憎みはするが、本来的な上位性それ自体を憎むことはけっしてない。下位者が、原理的にであれ上位者への上昇可能性を担保するという点で、ルサンチマンとの異質性が明らかになる。

悪い上位者が、理をくもらせているならば、下位者は即座に攻撃して上位者を上位の位置から引きずり降ろし、それに代わって自分が理を体現し上位者になろうとするのである。ニーチェ的に言うならば、基本的に世界や他者を肯定するこうしたあり方は、観念の野獣が現実の行為の野獣へと転換する瞬間ともいえよう。とはいえ、現実には上昇への道が阻まれている下位者が多いのであり、韓国社会においてそれらの人々の恨がキリスト教的なルサンチマンに吸収される可能性はあったのである。

中国におけるルサンチマン概念の変容に

については、「蒋介石における報恩以徳の思想について、東アジア地域の思想・文化におけるルサンチマン研究Ⅲ（平成22年度科学研究費報告）、2-14、2011」において考究した。蒋介石は、「報怨以徳」という理念を基調として、昭和20年8月15日づけの声明を世界に発信した。この言葉は『老子』に記述されているものとして名高いが、それは伝説的な老子の造語というよりも、むしろもっと古くから存在する成句であり、それだけに中国人の生き方に関係し、大きな波紋を投げかけ続けてきたものと見える。中国では古来、過酷な生存競争に打ち勝って、文字通り命を永らえてきた。悠久のような長い歴史のなかで混乱期には、頻繁に人口の半減現象が起り、そのつどまた人口が回復した。敗者は抹殺されるのが常識の世界だった。中国人にとっては「恨み」を許すかどうかは、「宋襄の仁」の故事につながる人生の死活問題だった。「無為」、「無事」、「無味」は、対象との関係に縛られて、人生に煩わされた自己認識への決別を勧めるような性格を有している。意味のある行為や営み、味感覚の常識的な観念を否定して、その対極に立とうとする。そこに融通無碍な精神の活動が獲得できるのである。対概念の後三者は、授与と贈与に言及しているので、単に一個人の内部的レベルではなくて、世間における対他者関係に焦点を集めながら、言及する。なかでも、人間関係の感情的な縛れを意味する「恨み」については、大きく与えるとか多く返却するとかいうことよりも、はるかに重要な懸案事項であろう。相手が自己に悪事を働いた場合にどう対処するのか、という疑問に応じて、老子は「怨みには徳で報いる」と答えるのである。このようにパラドックスに満ち溢れた人生に対して、老子は両極端の概念の間で一方に偏らず、通念で固められた認識を相対化する。そ

の両概念からの超出によって彼は、無為自然の聖人の域に達しようとするのである。

以上のような成果より、日本・朝鮮半島・中国いずれの領域においてもルサンチマン概念の存在は確認できるのであり、それらのルサンチマンがその地、その時代に生きる人々の原動力の一つの源泉となることが明らかになったと思われる。こうした視点は、各地域における個別的研究においてはふれられることかもしれないが、東アジア領域を俯瞰する立場で提示されることは希有であり、かつルサンチマン概念を手がかりとする視点の提示は皆無であるといえる。本研究のさらなる課題としては、こうした理論的枠組みの下で、政治や経済の実学的場においてルサンチマン概念がいかに現れ、機能しているかについての考究が求められようと思われる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

- ① 菅野孝彦、朝鮮半島における儒教受容－高麗時代末から朋党闘争へ－、東アジア地域の思想・文化におけるルサンチマン研究Ⅲ (平成22年度科学研究費報告)、15-22、2011、無
- ② 菅野孝彦、三宅光一、朝鮮半島における恨思想とルサンチマン、東アジア地域の思想・文化におけるルサンチマン研究Ⅱ (平成21年度科学研究費報告)、2-10、2010、無
- ③ 菅野孝彦、朝鮮半島における儒教受容、東アジア地域の思想・文化におけるルサンチマン研究Ⅱ (平成21年度科学研究費報告)、11-18、2010、無
- ④ 菅野孝彦、東アジア地域の思想・文化におけるルサンチマン研究 (平成20年度科学研究費報告)、1-14、2009、無
- ⑤ 菅野孝彦、フィンセント・ファン・ゴッホにみる絵画と思索との架橋、筑波大学哲学・思想論叢、26号、1-13、2008、有
- ⑥ 菅野孝彦、L. フォイエルバッハ思想の意義と限界、東海大学総合教育センター紀要、28号、45-54、2008、無

[学会発表] (計3件)

- ① 菅野孝彦、稲盛和夫について、ビジネス・エシックス研究会、2011年2月13日、関東学院大学
- ② 菅野孝彦、日本におけるルサンチマン概念について、東海大学文明研究所、2009年7月31日、東海大学

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

菅野 孝彦 (KANNO TAKAHIKO)

東海大学・総合教育センター・教授

研究者番号：50221908